

## 自己評価報告書

平成23年4月1日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520214

研究課題名（和文） ポストインペリアル英国文化と長い20世紀

研究課題名（英文） Postimperial English Culture and The Long Twentieth Century

## 研究代表者

大田 信良（OTA NOBUYOSHI）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：90233139

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英米文学、比較文学、文学論、西洋史、思想史

## 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、ポストインペリアル英国文化、すなわち、脱植民地化の動きに伴う20世紀全般にまたがる英国の政治および文学・文化の総体を、明らかにすることにある。1920年代を中心とする狭義のモダニズム文学、戦間期に再編制される国民文化、50年代の文化研究といった、英国20世紀前半50年の時間的・空間的範囲をさらに拡張して、現在ますます顕著となる文化のグローバル化と新たな帝国主義のさまざまな関係性を解釈する。

具体的には、研究対象である英米両国の拡張主義的な文化空間に繰り広げられる長い20世紀を、以下の3つの研究主題領域に区分し、ポストインペリアル英国文化の全体像を把握する。

(1) グローバル化や多文化主義といったポストインペリアルな政治文化を特徴づける、英国のリベラリズム・社会主義の文学や社会思想、および、植民地文学。

(2) 80年代サッチャリズム以降の英国文化の代表的な文化的生産物としてのヘリテージ映画とそのグローバルなコンテクストとしての米国ハリウッド映画産業。

(3) Raymond Williams らによる50年代英国の文化研究に対して人種や帝国主義の観点から批判あるいは発展させたカルチュラル・スタディーズ、および、それらに批判的に反応・連動してきた英米のポスト構造主義以降の批評理論。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 英国リベラリズムの政治文化については、まず、Virginia Woolfを取り上げ、「金貨のポリティカル・エコノミー——帝国の文

化とブルームズベリー・グループ」を論文執筆するとともに、日本ヴァージニア・ウルフ協会のプロジェクトでもある遠藤不比人・大田信良ほか編『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』研究社、2008. 337-59. を企画・編著として出版した。さらに、日本ヴァージニア・ウルフ協会の例会（3月21日於同志社大学）で『『転回する』The Hours? ——ブルームズベリー・グループとポストインペリアル英国文化』、および、日本英文学会東北支部会シンポジウムで「マナーへの思索＝投機(speculation)とサッチャリズム以降の帝国」を、口頭発表した。

フェビアン協会 Webb 夫妻の社会主義的言説との関係やブルームズベリー・グループのリベラルな文化のグローバルな転回を論じたものとしては、日本英文学会全国大会、特別シンポジウム「知識人の作法? ——リベラリズム、歴史、文学」2010年5月30日於神戸大学で司会をし、講師としても「知識人の「誕生」とブルームズベリー・グループ第2世代の作法——リベラル・イングランドのトランスアトランティックな転回」を発表した。また、この研究の前史となる博論を、『帝国の文化とリベラル・イングランド』として出版した。

(2) 英国ヘリテージ映画の再考については、まず、研究会「ポストインペリアル英国文化と長い20世紀」を立ち上げ、月1回以上の発表をもとに、論集『ポスト・ヘリテージ映画——サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』を企画・編集し、2010年上智大学出版より出版した。

(3) 英米批評理論の歴史化については、ロ

レンスとその英国文学理論の問題を、ブルームズベリー・グループの転回の一部として捉え、ニューヨーク知識人や米国モダニズム研究制度に結び付け、ポストインペリアルな英国文化の拡張する可能性を探った。この成果は、“Lawrence and Postimperial English Culture”として日本D・H・ロレンス協会全国大会シンポジウム“D. H. Lawrence Studies in East Asia”において発表し、その学会誌に同名の論文として発表した。さらに、英米批評理論の転回を、アメリカ文学学会全国大会シンポジウムの発表「誰も Edward W. Said を読まない？—終わらない冷戦と Reagan 期米国批評理論のさまざまなはじまり」および論文「批評理論の制度化についての覚書—トランスアトランティックな文学・文化研究のために」で、ポスト構造主義の批評理論も射程に入れて、論じた。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)3つの具体的な研究領域のうち、(2)は1冊の論集および2冊の続編を実質的に準備中であり、(1)(3)についても、それぞれ1冊の単著としてまとめ出版するべく、著書・論文・発表を十分に発表しているから。

### 4. 今後の研究の推進方策

(1)英国リベラリズムの政治文化については、ブルームズベリー・グループの政治文化を20世紀末から現在に流通するアソシエーション、シティズンシップあるいはネオリベラリズムとの関係性において再吟味する。この成果は、2011年度日本D・H・ロレンス協会全国大会シンポジウム「『トマス・ハーディ研究』再読のために—リベラリズム、帝国、「教養小説」の転回」において「『トマス・ハーディ研究』と金融資本—スパイ小説／“Sex Novels”／「教養小説」として発表する。また、ウルフの30年代のテキストとアソシエーションについて、日本英文学会関東支部会『関東英文学研究』第4号巻頭論文に発表する予定である。

(2)英国ヘリテージ映画の再考の第2弾として、10月以降、上智大学等に於いて企画等も含めた討議・研究発表を4回行うなど、『ポスト・ヘリテージ映画2—ヘゲモニー国家アメリカの変容とサッチャリズムの始まり』（仮題）出版の準備をはじめた。

また、さらにそのスピンオフ・プロジェクトとして、『グローバル化するポピュラー・カルチャー：英国文化政策のポリティカル・エコノミー』という、文学・文化研究と文化政策学分野横断的な論文集出版の準備を実施し、慶應義塾大学出版会より2012年5

月刊行することが決定しており、現在執筆中である。

(3)英米批評理論の歴史化の作業については、まず、英国の学者批評家 Frank Kermode とニューヨーク知識人との関係をグローバルに編制され制度化されたモダニズムの歴史的コンテクストにおける解釈として、「ベケット、ナボコフ、そして文化冷戦—「モダニズム文学」の制度化」を、川端康雄ほか編『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2000年』東京：慶應義塾大学出版会、2012年6月刊行予定に、発表する予定である。さらに、村上東編『冷戦期とアメリカン・カルチャー 覇権国家の文化装置』京都：臨川書店、2012年6月刊行予定への寄稿論文として、「誰も Edward W. Said を読まない？—終わらない冷戦と Reagan 期米国批評理論のさまざまなはじまり」を準備中である。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①大田 信良、「批評理論の制度化についての覚書—トランスアトランティックな文学・文化研究のために」『言語社会』一橋大学大学院言語社会研究科2009年度紀要、査読無、第4号、2010、183-212

②大田 信良、“Lawrence and Postimperial English Culture”『D・H・ロレンス研究』、査読有、第20号、2010、43-59

[学会発表] (計1件)

①大田 信良、「知識人の「誕生」とブルームズベリー・グループ第2世代の作法—リベラル・イングランドのトランスアトランティックな転回」日本英文学会全国大会、特別シンポジウム、2010年5月30日、神戸大学（兵庫県）

[図書] (計2件)

①大田 信良、『帝国の文化とリベラル・イングランド—戦間期イギリスのモダニティ』東京：慶應義塾大学出版会、2010、1-259

②大谷伴子、松本朗、大田 信良、加藤めぐみ、木下誠、前協子共編著、『ポスト・ヘリテージ映画—サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』東京：上智大学出版、2010、1-251。(第6章「『スキヤンダル』—金融資本とカントリーハウスの文化」169-98、終章「英米の『特別な関係』のかたへ」199-210、その他コラム、年表等)